

# 活 動 報 告

## 1. はじめに

昨年12月9日、部落解放・人権政策確立要求京都市実行委員会は第35回大会を、京都府部落解放センターで開催しました。市実行委員会の構成団体から60人が参加し、市実行委員会の加藤章善会長は、「本日で退任、ということで感慨深い。来年は水平社創立100年という節目の年だが、73歳の私が学生だった頃には藤村の『破戒』主人公、丑松の心境がよくわかった。差別事象がおこったら『それはいかん』と言える人間が増えるように、これからも奮闘していただきたい」と述べました。

来賓からは、京都府実行委員会を代表して西島藤彦副会長が、「部落差別解消推進法ができて5年経ったが、実効性は高まっていない。そこで地方議会の条例を作っていくと全国的に運動を展開している。人権委員会の設置を含む人権法を作っていくことも喫緊の課題だ」と訴えました。京都市からは古川真文文化市民局長が「コロナ差別が問題となる一方で、支えあい乗り越えていくという市民からの応援もいただいております。多様性を認め合い包摂しあう共生社会をめざし取り組んでいく」とする市長からのメッセージを代読しました。民主・市民フォーラム京都市議員団、公明党、各市議員団からは、通常ご挨拶をいただくものの、今回はメッセージ対応でお願いしました。議事の進行にうつり、村上光幸事務局長が、活動報告、基調提案をおこない、会計報告が拍手により承認され、役員人事の選出では、新会長に臨済宗妙心寺派法務部長の吹田良忠さんが選出され、「これから共に、頑張っていきたい」との挨拶をいただきました。最後に大会決議等の議案が全員の拍手で採択され、閉会挨拶を宮崎茂副会長がおこないました。

## 2. 京都市実行委員会独自事業

京都市実行委員会では、毎年大会後に独自事業として「考えてみませんか あなたの人権・わたしの人権」を開催し、講演会をおこなっています。昨年は

「宗教がもたらした差別『是旃陀羅』とは」と題し、東本願寺僧侶の阪本仁さんにご講演をいただきました。「是旃陀羅問題は大変根深く難しい。私自身被差別部落当事者であり、僧侶として引き裂かれる思いだ。部落解放運動にとっても長年の懸案で1934年に水平社の最初の書記長であった井元麟之さんが、『梅陀羅は日本でいうエタのことで、前世のむくいだ』とする僧侶の説教に対してあまりにも差別的な布教であると申し入れをしたのが発端である。東西両本願寺は長年にわたり問題提起されてきたが、経典の書き換えの困難と、経典の文言に痛みを覚える人がいるという現実に板挟みになってきた。水平社100年を前に東本願寺ではやっと「決議」がなされ差別語であることを認め謝罪した。互いに尊敬し合える世界をつくっていくために、今後もみなさんと共同で考えていきたい」と話しました。

### 3. 中央集会と政府各省交渉

2021年部落解放・人権政策確立要求第1次中央集会が10月28日、東京神保町の日本教育会館一ツ橋ホールで開催され、全国から432人が参加、京都市実行委員会から2名が参加しました。コロナ感染予防から人数をしぼり、2年ぶりの開催となり、包括的な人権侵害救済制度の確立を基調報告としました。

また、2022年度部落解放・人権政策確立要求第1次中央集会が5月22日、東京・永田町の星稜会館で開催され、全国から321人、京都市実行委員会から1名が参加しました。西島藤彦事務局長が、ネット上の誹謗中傷などを許さない実効性のある施策の必要性を訴えました。集会後、衆参国会議員に「人権侵害救済法」制定にむけた要請をおこないました。

### 4. 研究集会等への参加

京都市実行委員会では、部落解放・人権政策確立についての認識を深めるため、各研究集会等へ積極的に参加・協賛してきました。

具体的には、京都府実行委員会が開催した第69期、第70期の「京都市人権文化講座」への参加をはじめ、2022年9月25日には、“ふれあい・交流・感動を求めて”をテーマにおこなわれた「リベレーションフェスタ2022」に協賛しました。

コロナ禍により2年間開催を見送りましたが、今年は3年ぶりに梅小路公園で、時間を短縮しながら開催。人権パネルのコーナーでは水平社100年の歩みを概観するパネルを、真宗大谷派解放運動推進本部から借受けて展示し、ステージコーナーや模擬店を通じ「部落解放・人権政策」確立の必要性を訴えました。

2022年2月23日、「第53回人権交流京都市研究集会」に参加し、『めざそう！共生・協働の社会創造』と訴えました。集会は午前中の全体集会で映画「かば～西成を生きた教師と生徒ら～」の上映をおこないました。日本社会における、様々な差別や矛盾、貧困や困難にさらされる子どもたちの姿を様々な角度から、啓発やきれいごとでは収まりきれない「エンターテインメント」として描き出した映画であり、135分という長丁場でありながら、参加者は最後まで集中して鑑賞しました。午後からの分科会では、「部落の歴史」、「多文化共生」と大きく二つの分科会を設けました。第1分科会では上杉聰さんが「～水平社宣言と日本国憲法をつなぐ～」をサブタイトルとして、人間を尊敬するという水平社の精神が憲法を通じて現在に生かされていることを講演しました。第2分科会では「～映画『かば』に描かれた実在の教師の姿が問いかけるもの～」と題し、前半に『かば』製作総指揮・原作・脚本・監督をてがけた川本貴弘さんご本人と、出演女優であるさくら若菜さんのトークセッション。後半は教師、在日、女性等様々な立場からのパネルディスカッションが展開されました。

部落解放・人権政策確立要求京都府実行委員会が毎月1回定期発行している『ひゅーまんらいと』を市実行委員会の構成団体に発送しました。『ひゅーまんらいと』は8月で438号を数え、第4面の人権文化講座の講演録要旨は研修教材としても利用されています。